

## 臨床心理学と認知科学 —「知」をめぐる—

元札幌学院大学大学院臨床心理学研究科 室橋春光

---

臨床心理学の歴史は、心理学の歴史の中で古いわけではない。サトウ(2008)によれば、Witmer, L.がPennsylvania大学に世界初の心理学的クリニックを1896年に創設し、Kraepelin, E.は「精神医学における心理学実験」を1896年に発表している。Freud, S.は、1895年に「科学的心理学草稿」を著している。1879年にWundt, W.が心理学実験室をLeipzig大学に開設した20世紀に入ろうとする頃は、現代科学への助走路でもあった。この頃、心理学という学問を、こころの問題に適用しようと考え始めた研究者たちが現れ始めたということでもあろう。

神経科医として出発したFreudは、その100年ほど前から人気が出始めていた骨相学に注目したと思われるのだが、頭蓋骨の形状と精神が対応するという安易な捉え方に失望したのであろう。彼は、神経科学的心理学を発展させようとして、心理学と神経学を統合させる試みを始めていた。そして、草案として記述されたものがFliess, R.へ書簡として送られることになる。Freudは、現在の神経科学的知見からみても十分に通用する見解を当時から有していた(室橋, 2022)。しかし、その後本格的に展開されていくことになる精神分析をその枠に収めるのには、当時の知見はあまりにも不十分だった。認知神経科学が脳の機能を探り始めてから、精神分析に関心を持つ脳研究者たちは、そのような観点から脳機能を捉える試みを始めている(室橋, 2022)。

臨床心理学は、特に精神医学とは深く結びついてきた歴史がある。しかし、そこに心理学があったかといえば疑問もある。実験を主たる方法とする科学的心理学によって複雑な心のはたらきを解

明することは、その後、放棄されたかのようにみえた。こころの臨床に関心を持つ研究者たちが、基礎領域に展開する心理学に絶望したからであろう。現在でも、認知神経科学と精神分析との間には深い溝があり、容易に埋まるものではない。

人々は昔から、人の心の働きに関して、「知情意」という区分けを用いてきた。

認知科学は、このうちの「知」を扱う領域であり、「情」と「意」については、当初は領域外の事象であった。しかし、近年は、認知科学領域においても、「情」と「意」の関わる研究が行われるようになってきている。脳機能研究が進むにつれて、これらの要素の密接な関係が可視化されるようになってきたこともあろう。

臨床心理学の扱う領域は、主に「情」であり、それに惑わされるものとしての「意」であったといえよう。「知」の障害は医学的治療の対象になり難く、したがって「知」は臨床心理学の主たる対象ではなかった。人間関係における心理的困難を扱うことが臨床心理学の主たる役割であり、その背後にある重要な要因は、「情」であった。近年、「情」を「知」によって統制しようとする試み、すなわち認知療法、あるいは認知行動療法が注目されるようになった。特に、うつに関しては有効性が認められるようになってきている。しかし臨床心理学は、依然として「知」のメカニズムを扱い、「知」を対象とすることには、躊躇しているようにもみえる。「知」と「情」の関わりやしきみも、十分に解明されているわけではない。

こころのしきみは、世の中では複雑怪奇であるとみられてきた。確かにその通りであろう。しかし、だからこそ、こころの臨床に携わる人には、

シンプルなモデルが必要でもある。もちろん、それは骨相学ではない。

脳のはたらきがこころのはたらきと関わるものであると認めるのであれば、生物学的要因を考慮したこころのモデルが求められよう。そのようなモデルは、無論、これまでに多数提案されてきた。しかし、脳の仕組みが解明されるにつれて、単純なモデルでは済まなくなっている。

ところが近年、認知科学領域においてシンプルなモデル、正確に言えば古来からの見方の焼き直しともいえるかもしれないが、こころの「二重過程理論」とよばれるモデルが登場している(室橋, 2021)。このモデルはふたつのシステムからなっている。システムⅠは主に進化的に古い脳の扱う機能を反映しており、他方システムⅡは主に新しい脳の扱う機能を反映している。この理論を経済学に応用して、行動経済学として発展させたKahneman, D.に言わせれば、システムⅠは端的には「衝動的かつ直感的」であり、システムⅡは「論理的だが怠け者」なのである。このモデルは認知過程を反映するのであるから、「知」を扱うモデルである。しかし、システムⅠは「情」と「意」も扱う。それが動物という存在だからである。このモデルは、Freudの想定した一次過程と二次過程とも矛盾しない(室橋, 2021)。

こころの「二重過程理論」を用いて、臨床例を捉え直すことも、意味のないことではないかもしれない。「知情意」は人の心を表す要因であるが、「知」と「情」と「意」に分けて分析したとしても、それらの相互的關係をみていかなければ、「人の心」はみえてこない。人における「知」は、システムⅡに主に反映されているといえるが、そしてこのシステムがあるからこそ「人間」になり得るのであるが、人のこころの問題はそこにあり、臨床心理学の課題であるように思われる(奥田, 1967)。それは、「知」の絡む問題なのである。

動物には、栄養物を摂取し、天敵から逃れ、種を保存するという、生物としてのシステムがある。人も、もちろん動物であり生物であるから、それを実現するための機能をもつ。そのような目的に達するために、環境を知るための知覚機能と、目

的を実現するための行動機能がある。それらの機能は、システムⅠにビルトインされている。そして生物は、それらを可能な限り、最小限のエネルギーで駆動するように機能させている。それが生物の基本なのである(乾・坂口, 2021)。

粘菌という生物がいる。中垣は、粘菌に迷路を移動させ、最終的に最短経路が選ばれるという研究(中垣・山田, 2001)を行い、2度にわたってイグ・ノーベル賞を受賞した。もちろん、粘菌に知能とよばれるものが存在するわけではない。けれども、栄養物を確保するために移動するという生物としての目的のために、結果的には迷路を解いたのである。そのメカニズムは未だ解明されているわけではない。しかし迷路で選択された最終解は、粘菌が最少のエネルギーで栄養物に達することができるルートなのである。人は、迷路を知覚し、システムⅡにより選択し得る行動をあらかじめシミュレーションすることにより、実際に行動する前に解を導き出すことが可能である。それが知能のはたらきということになる。

膨大な感覚入力を縮約し抽象化して、刺激の拘束を弱め処理の自由度を増すというやりかたが、脳の高次処理における特徴である。しかし、そのために、最終的な解決を意識が関わる場—ワーキングメモリーで行わなければならなくなった。

生物としての目的を保つために、システムⅠはシステムⅡに制限をかける。その制限は、知覚機能に対する感情、行動機能に対する情動というかたちで現れる。

安心・安全ということばが広まっている。たとえば、我々の遠い祖先は、熊などに襲われる危険を常に感じながら暮らしていたであろう。しかし現在の我々は、市街地に熊が現れるという、安心・安全が保たれない状況に危機感を抱いている。

安心・安全とは、文明が作り出す人工的枠組において実現するものである。昔は日常生活の中にあつた死というものも、現代においては医療の場で処置されるものであり、墓地は街のはずれに置かれることになった。我々が食する肉も、屠殺場という隠れた場で処理されたものであり、それを通常目にすることはない。そのような我々に

とっての予想外の出来事あるいは予想したくない出来事が、可能な限り生じないようにする、あるいは予想の範囲内におくようにする枠組が文明というものであり、安心・安全なのである。それはすなわち、そのような事象を脳が知覚することを避け、その処理のためにエネルギーを使わないようにするという、生物としての基本に沿ったことなのである。そのような事象を知覚することのなように工夫することがシステムⅡの役割であり、それを考え出すためには、実は、多大なエネルギーを用いることになる。しかし、文明装置として出来上がった枠の中で暮らす人々は、そのような苦勞なしに、安心・安全を享受できることになるのである。

現代に生きる我々は、安心・安全の枠の中でシステムⅠを駆動したいと願っている。それは、システムⅡの優位性であるのかもしれないが、臨床家はクライアント一人ひとりの「知」のありかた—両システムに介在する「知」のありかた—を探らなければならないように思われる。

## 文 献

- 乾敏郎・坂口豊（2021）：脳の大統一理論. 岩波書店.
- 室橋春光（2021）：こころのDual Process Theory  
札幌学院大学心理学紀要, 3, 13-26.
- 室橋春光（2022）：認知神経科学の視点からみた精神分析：「科学的心理学草稿」をめぐって  
札幌学院大学心理学紀要, 4, 27-44.
- 中垣俊之・山田裕康（2001）：迷路を解く巨大ア  
メーバ細胞 粘菌 生物物理, 41, 244-246.
- 奥田三郎（1967）：臨床心理学における“人”の  
問題 北海道大学教育学部紀要, 13, 3-41.
- サトウタツヤ（2008）：心理学ってなんだろう—  
欧米諸国における臨床心理学の始まりとしての  
1896年 心理学ワールド40号